

「愛の実り」

2022年4月

中学宗教主事 川俣 茂

恵みの業をもたらす種を蒔け

愛の実りを刈り入れよ。

新しい土地を耕せ。

主を求める時が来た。

ついに主が訪れて

恵みの雨を注いでくださるように。 (ホセア書10章12節)

新しい年度がスタートしました。しかし、感染症によるさまざまな不安が今なお、日本のみならずこの社会全体を覆うと共に、無用な対立に由来する、またさまざまな自然災害によって、「日常」、そして「生活」が無残にも引き裂かれてしまっている現実があります。それまでの「当たり前」が「当たり前」でなくなってしまう現実があります。それでも私たちは一步一步、歩みを進めていかなければなりません。そのような現実の中にあっても、私たちは自らの将来のために、社会の未来のためにも、私たちがなりの方法で、さまざまな形で種蒔きをしていかなければなりません。なぜなら、種蒔きは「恵みの業をもたらす」ものだからです。

もちろん、「むやみやたら、適当に種を蒔けばいい」というものではありません。蒔く土地の状況など、いろいろと考えて蒔き、土地を耕すだけではなく、水やりや草引きなどの世話も必要です。長い間を経て、時には犠牲を伴いながら、まさに忍耐の時を経て刈り入れ、収穫の時を迎えることになります。

ですから、「スタート」である種蒔きや「結果」という収穫ももちろん大切ですが、「プロセス」でもある「耕す」ことがとても重要だということがよくわかると思います。しかもそれを他人に任せてしまって……ではなく、自分自身がしっかりと意識し、自分自身でいろいろと対応していなければならない部分が大きいということになるでしょう

(次ページに続く)

か。それだけではありません。よく言われるように、「手塩にかけて育てる」、つまりどれだけ愛情を注ぐことができるか、どれだけ愛情を込めて育てるかも重要です。だからこそ「愛の実り」となるのです。

ただし、種蒔きにも収穫にも「時」というものが関わってきます。「自分の都合で収穫を早める」ということはできません。それをしてしまったならば、先ほどの「手塩にかけて育てる」ということを自ら放棄してしまうことに、すべてが無駄になってしまうこととなります。

しかし聖書は語ります。「種を蒔く」「新しい土地を耕す」という私たちの行動が重要だというのはもちろんですが、最も重要なのは、神による支え、導き、守りを信じること、そしてその神の支え、導き、守りに感謝すること、そして何よりも「主を求める」ことだ、と。そうすれば「ついに主が訪れ」ることになるとも。

実に清教学園の歴史は、この言葉の繰り返し、いやこの言葉の実際例だったということが出来るでしょう。新しい土地を耕し、主を求めて祈り続け、ついに主が訪れて恵みの雨が注がれてきた歴史が学園には刻まれています。

新約聖書『コリントの信徒への手紙二』9章6～7節にはこうあります。

つまり、こういうことです。惜しんでわずかしか種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。

惜しまず蒔き続け、不承不承、強制ではなく自分で決めたとおりにする。犠牲や忍耐を伴いながらも「喜んで」その業に携わる人を神は愛してくださる。と同時に、その人も神の愛を感じるようになる。清教学園は神の愛に包まれる、そのような歴史をたどってきた学園なのです。